
Gカップ グラドル

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Gカップ グラドル

【Nコード】

N7622B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

とびきりの胸を持つグラビアアイドル奥田恵理香。彼女は恵まれた才能を持つが自堕落な性格でマネージャーの山本さんは大弱り。けれどその山本さんが頑張っている。芸能界でよくありそうなお話を書いてみました。

第一章

Gカップ グラドル

「うっん、もう一杯」

ベッドの中で下着姿の女が寝言を言っている。

「もう一杯だけ頂戴、もう一杯だけでいいから」

下は白のショーツで上はショーツと同じ色のタンクトップである。胸はかなり大きく寝返りをつつ度に胸が揺れる。胸だけでなく全体的なプロポーシオンもいい。

髪形は短めでショートよりも少し長いといった程度である。黒い髪量はかなり豊かで癖のある髪だ。そのせいでショートにはとても見えない。

閉じられた目は二重で顔全体としては童顔である。綺麗ではないが可愛いといった顔立ちであった。歳は二十位であろうか。高校生よりも大学生の感じがする。

「飲ませてよ。そうしたら帰るからあ」

「帰る前に起きなさい」

そう言っていきなり頭を叩く者がいた。

「ふえ！？」

「ふえ！？じゃないわよ」

彼女がぼんやりとした目を覚ますとそこには白いカッターを上に着ただけの女がいた。黒く腰まである髪を後ろで束ねて切れ長の二重の目に透き通った鼻立ち、引き締まった唇をしていた。大人びた感じの美女であった。

「いい加減起きなさい。もう朝よ」

「あれ、あたし何時の間にベッドに！？」

「昨日苦労してここまで担ぎ込んだのよ」

カッターの女は目を怒らせてこう述べた。半ば開いた胸元と白い素足がやけに艶かしい。ベッドの上で目をぱちくりさせている彼女

とは違った意味で色気が漂っている。

「全く、お酒ばかり飲んで」

「カロリーは控えめにしてるわよ」

女はそう言っただけで起き上がる。そしてベッドの上であぐらをかきながらカッターの女に答えた。

「これでもね」

「それでもあれだけ食べたなら同じでしょ」

カッターの女はむっとした声で述べる。

「暴飲暴食は肥満の元」

「こつも言っつ。」

「グラドルなんだからね、注意しなさい」

「厳しいなあ、山本ちゃんは」

女は怒られながらベッドの上で頭をかいていた。

「大丈夫よ、ランニングもしてるじゃない」

「それでも節制は必要なのよ」

山本と呼ばれたカッターの女は怒ったまま言い返す。

「只でさえそれだけ大きな胸持つてるのに」

「ああ、これね」

応えるかの様に自分で二つの胸を持つてみる。乳首がタンクトップの上から浮かび上がる。

「これがあたしの売りなのよね」

「そうよ、今のところはね」

山本はその大きな胸を見ながらまた述べた。

「けれどあなたはそれだけじゃないでしょ」

「そうかなあ」

「そうかなあって」

彼女の素っ気無い言葉につい怒りを覚えた。

「あのね、あんたは私が見つけたのよ」

「山本ちゃんが？」

「オーデイションで。あんたはできるのよ」

「芸能界で？」

「その顔と胸だけじゃないんだから、それはよく認識しなさい」
「他にあつたつけ」

「歌上手いじゃない」

「カラオケ好きだから」

「お笑いもできるし」

「子供の頃から吉本とか観てたしね」

「お芝居上手いし」

「高校の頃演劇部だったから」

彼女は次から次に答えていく。実に淀みない返事であった。

「それだけのものがあるのよ。だから選んだのよ」

山本の言葉は異様なまでに力がこもっていた。

「奥田恵理香」

そして彼女の芸名を呼んだ。本名でもある。

「期待しているのよ、絶対にやれるって」

「けれどオーディションも何となく受けたものだし」

本人はあまりやる気のない仕草で頭をかきながら述べた。

「それにマンシオンで暮らせるって聞いて喜んで事務所に入ったのに。詐欺よ」

「マンシオンじゃない、しかも都心の立派な」

「山本ちゃんと一緒じゃない。何でよ」

「当然でしょ。タレントの健康管理の為に」

山本は毅然として答える。

「一緒にいないと。あんた唯でさえ自堕落なんだから」

「あたしは伸び伸びとしたいのよ」

「伸び伸びしてたらあつという間に太るわよ」

「別に太ってもいいし」

「あんたはよくても私はそうはいかないの」

声が厳しくなった。

「タレントなんだからきちっとしなさい」

「別にタレントじゃなくてもいいんじゃない、それじゃあ」
「文句言わない。さあ、早く起きなさい」
「はあい」

言い合いは山本の勝ちであった。恵理香は仕方なくベッドから出る。そしてまずは赤いジャージの上下を着た。山本はその横でカッターを脱いでいた。白いシックな下着姿で彼女もスレンダーないい身体をしていた。

第二章

彼女は青いジャージを手に取っている。恵理香はそんな彼女を見て言った。

「いつも思っけれどさ」

「何？」

「山本ちゃんもいい身体してるよね」

「な、何言ってるのよ」

「だって、すらりとしてるし」

山本の肩を後ろから抱いて言う。背は恵理香の方が大きい。彼女は一六六程で山本は一六二程であろうか。二人共決して小柄ではない。恵理香ははっきり言えば大きい方であろう。

「お肌だって綺麗だし。とてもあたしより年上には見えないわよ」

「私だってまだ二十五なのよ」

少し頬を赤らめさせて言い返す。桜色に染まった様子が結構可愛らしい。

「当たり前じゃない」

「あたしより綺麗だし」

「だから言ってるでしょ。節制しなさいって」

「だってあたしまだ二十歳だし」

恵理香は言う。

「そんなに気をつけることも」

「タレントはお肌が命なのよ」

ジャージのズボンを履きながら言う。脚も綺麗で整っている。

「いつも気をつけなさい、いいわね」

そして今度は上を着ていた。ジャージ姿がよく似合う。

「そうしたら山本ちゃんみたいになれるの？」

「だからあんたはタレントなのよ」

何度も釘を差す。

「お肌が荒れていたらずいでしょう」

「アップにならないとわからないんじゃない？」

「見ているファンは見てくれるわよ」

山本はあくまで厳しい。

「わかったわね。じゃあ行くわよ」

「はい」

「それが終わったらシャワーね」

「また一緒に入るの？」

「悪い？」

今度は怒っていないなくて尋ねる顔であった。

「何か誤解されないかしら、レズとか何とか」

「別にされないわよ。マネージャーなんだし」

「けれどマネージャーと噂になるってことも多いわよ」

「女同士だとないわよ」

山本はそれは心配してはいなかった。

「それに公でベタベタしているわけじゃないでしょ」

「それはそうだけれど」

「わかったら行くわよ、油断しているとすぐ太るから」

「了解」

こうして山本は恵理香を連れてランニングに出た。これが二人のいつもの朝のはじまりであった。タレントとそのマネージャーの朝である。

それが終わりシャワーを浴び朝食と身支度の後で事務所に向かう。

今日はまず事務所で打ち合わせであった。

「まずはここをね」

部屋に籠もり二人でグラビアの打ち合わせをする。卓を挟んで向かい合っていた。

「この水着で」

「その水着なの？」

紹介された水着を見て声をあげる。それは恵理香のあまり好きで

はない色の水着であった。白いビキニである。

「それ嫌よ」

「けれどここにはこれよ」

山本はそれでもこの水着でいこうとする。

「その方が映えるから」

「それじゃないと駄目なの？」

「駄目ね」

きっぱりと言い切った。

「ここにはこれしかないわ」

「うつつ」

恵理香はそこまで言われて口を波線の様にさせた。

「こっちの青のビキニの方がいいなあ、あたし」

カタログを指差してせがんできた。だが山本は厳しい。

「それは前着たでしょ？」

「だけれど」

「水着会社との都合があるのよ、我慢しなさい」

「どうしても？」

「着るだけで貴女が買うわけじゃないでしょ？」

「それはそうだけれど」

「そのかわりここではこれにするから」

「あっ、その水着ね」

ここでは山本は恵理香の気を引かせてきた。白のワンピースを提示してきたのである。どういうわけか恵理香は白いビキニは嫌いで、白のワンピースはいいのである。思えば変な話である。

第三章

「それなら」

「いいわね、それで」

「うん。山本ちゃんわかってるじゃない」

「外ではマネージャーと呼びなさい」

軽い言葉には釘を忘れない。

「とにかくそれでいいのね」

「うん、これなら」

「わかったわ。じゃあ雑誌の編集さんの方とはそれで話をしておくから」

「お願い」

「思ったより早く終わったわね」

話はそれで終わりであった。山本は前に置いてあったコーヒを飲みながら述べた。

「次は歌のレッスンだけれど」

「カラオケね」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ」

ここで頭をぽん、とはたかれた。

「今日はオフじゃないのよ」

「ちえっ」

恵理香はそう言われて口を尖らせた。

「いいじゃない、それでも」

「駄目に決まってるでしょ、何考えてるのよ」

「だって歌うのは同じなんだしさ」

「違うに決まってるでしょ。どうしてそうなるのよ」

「レッスンで本当に上手くなるのかなあ」

「実際になってるじゃない」

山本は言う。

「結構」

「あたし最初から歌は上手いわよ」

恵理香は懲りない感じで反論する。

「中学校の時からカラオケ三昧だったし」

「まあそれはそうね」

それは山本も認めた。

「喉も強いし」

「四時間ぶっ通しで歌っても平気よ」

「だからといってレッスンはなくならないわよ」

「何だ」

「いつも言ってるでしょ。綺麗な原石も磨かなければ原石のままだ
つて」

「別に原石でもいいし」

「そんな馬鹿なこと言ってるのが大変よ」

「あたし天才タイプだし」

「天才は九九パーセントの努力と一パーセントの閃きよ」

言うまでもなくエジソンの言葉である。

「つまり努力するのが天才なの。あんたは単なる怠け者」

「なまけものだって生きてるじゃない」

「それは動物のナマケモノでしょ、あんたは人間」

「厳しいなあ、本当に」

「愛の鞭よ」

朝と同じ様なやりとりだった。そんなやりとりでグラビアの打ち
合わせをした後で歌のレッスンだった。そしてそれが終わってから
今度は番組の収録であった。

「うふふ」

恵理香は車の中でにこにここと笑っていた。白い乗用車で山本が運
転している。

恵理香はグレーブラウンの上着にデニムのミニであった。若い女
の子らしい格好を選んだ。それに対して山本はグレーのスーツ、タ

イトはミニで黒ストッキングを履いている。どちらもよく見ればかなり艶かしい姿である。

「何かおかしいの?」

「だってこの番組ね」

「ゴールデン枠だから?」

あるバラエティ番組のゲストである。恵理香はこちらでもあけっぴろげで天然なトークで人気が出て来ているのである。何かと器用なのだ。

「それもあるけれど」

「他には?」

「今日さ、あの番組の主演やってた人が出るのよね」

「誰?」

「ほら、あのずっと続いてるヒーローよ」

恵理香は言う。

「出るじゃない、あの人か」

「ああ、彼ね」

いつも話していることなのですぐにわかった。

「そういえば出てるわよね」

「何か得した気分なのよ」

恵理香はそのヒーローを演じている俳優のファンなのである。だから楽しみにしているのだ。

「サインもらっていいかな」

「好きにしたら」

山本は突き放したように答えた。

「いいの?」

「それ位はいいわよ」

「ふうん」

「サインって貰える時に貰えばいいから」

「優しいのね、そういうところは」

「こんなので厳しくするつもりはないわよ」

「そうなの」

「ただしね」

ここで付け加えた。

「そのタレントと一緒に食事に行ったりとかは絶対に駄目よ」

スキャンダルは絶対に許さないというわけである。

「そうなの」

「そうよ。だから私がいつも一緒じゃない」

「厳しいなあ」

さつきとは全然逆のことを述べた。

「こういうところは厳しくしているの」

山本はきつい声で返した。

「わかった？」

「けれどあたし別にそんなことしないよ」

恵理香はそう反論する。

「付き合ってるのっていつも一人だったし」

なお今はいない。山本に会ったのは丁度別れたその時だったからだ。

「相手が問題なのよ」

だが山本の警戒はそこではなかった。

第四章

「碌でもない相手と付き合ったら後が大変なのよ」

「それはわかっているわよ。けれどヒーローよ」

「それがどうかしたの？」

「悪い人じゃないと思うけれどなあ。正義の味方なんだし」

両手を頭の後ろに回して言う。それから椅子にもたれかかる。

「最近のシリーズのヒーローでしょ」

「うん」

「じゃあ駄目よ」

山本は前を運転しながら答えた。

「何で？」

「最近のあのシリーズのヒーローは悪い人も出るからね」

「まあそうだけれど」

「実際はどんな人かなんてわかったものじゃないわよ」

「けれど最初のヒーローやってた人は凄くいい人じゃない」

「あの人は別よ」

本当に最初のそのヒーローをやっていた俳優である。濃い顔に太い声の特徴である。笑いがとりわけ素晴らしい。

「出来た人なのよ、すごく」

「そうよね」

「そうした人ならともかく本当の悪役に引つ掛からないようにしなさいよ。付き合ってもフォーカスされればそれで終わりなんだからね」

「早々見つからないわよ」

「甘いわね」

山本の声も顔も無然としたものになった。

「壁に耳あり障子に目ありよ」

そしてこうした時にお決まりの諺を出した。

「それに相手はハイエナなのよ」

「ハイエナ」

「そうよ、ああしたイエロージャーナリズムはね。人のプライバシーを食い物にしているんだから」

「嫌な奴等なのはわかっているつもりだけれど」

「少なくとも真つ当な人間はタブロイドとはいえ下品なことはいなものだ。卑しい人間だからこそ卑しいものを書く。そうしたものである。」

「そうした連中に隙を与えないこと。いいわね」

「じゃあ付き合うなってこと？」

「そこまでは言わないけれどね」

「それでも注意しろということだ。」

「男は要注意なのよ」

「いつも言われてるけれど」

「男で駄目になったって話本当に多いから」

「芸能界だけ？それって」

「芸能界だけじゃないわね」

「山本もそれは認めた。」

「色々なところであるわ」

「そうよね。けれど特に多いってことね」

「特にね」

「ここで山本の声が剣呑なものになった。」

「この前あなたに言い寄っていたあの大物俳優」

「あの人のことは知ってるわ」

「恵理香とて馬鹿ではない。それどころか実は結構頭の回転はいい方だったりする。」

「女好きだから話に乗るなってことね」

「女は芸の肥やしって言う人だから」

「山本はその言葉を言いながら眉を顰めさせていた。」

「冗談じゃないわ」

語気に怒りが混ざっていた。

「そんなことって。勝手だと思っでしょ」

「それはね」

恵理香としても同意であった。

「女だつてその人格があるから。山本ちゃんいつも言ってるわよね」

「だから干されて奥さんにも逃げられたのよ」

「それ考えると悲惨ね」

「自業自得よ」

山本はむっとしたまま言う。

「干されてああしてたまにテレビで出て何とかやっていくしかなくなつたのもね。自分のせい」

「ああはなりたくはないわね」

「だから」

言葉がビシツとつながつた。

「男には気をつけなさい。女でもああなるんだから」

「男は芸の肥やしにはならないのね」

「そういう考えだからああなつたからね」

「わかつたわ。けれどさあ」

「何？」

「あたし処女じゃないよ、わかつてると思っけれど」

「な、何言ってるのよ」

山本は恵理香のその言葉に顔を赤くして応える。顔は彼女の方を向いていた。

「いきなり」

「ちょ、ちよつと山本ちゃん」

「何？」

「前、前」

「おつと」

慌ててハンドルを切る。危つく対向車線に突っ込むところであった。

「ああ危なかった」

「あんたがいきなり処女じゃないなんて言うからよ」

「いや、さっきのは山本ちゃんが」

「私のせいなの!？」

「幾ら何でも余所見はよくないよ」

「うう……」

今回は山本の負けであった。

「けれどあたしもう二十一だし」

恵理香は言う。

「高校でもう彼氏いたしさ。当然じゃない」

「当然なの、それって」

「けど山本ちゃんだってそうでしょ」

「まあね」

それは認めた。

「じゃあ特に驚くことないじゃない。大体二十五で処女なんていいでしょ」

「それはそうだけれど」

山本も彼氏はいるので。それは恵理香も知っている。

第五章

「相手ってあれでしょ。今の彼氏」

「そうよ」

それに頷いた。

「何時？初体験は」

「何時だっていいでしょ」

顔を前に向けて運転しながら答える。だがその顔は真っ赤になっ
ている。

「大学生の時？やっぱり」

「だから何時だっていいじゃない」

顔がさらに赤くなる。

「じゃあそう思っておくね」

「勝手にしたら」

山本は無然とした声を返す。

「けれど何でそんな話になるのよ」

「いやあ、山本ちゃんも結構可愛いところあるんだなあって」

「からかわないでよ」

「御免御免。それでね」

「今度は何？」

「あのヒーローDVD買ってもいい？あの人が出てるの」

「それは別にいいわよ」

山本もそれ位は許した。

「演技の勉強にもなるし」

「ありがと」

「けれど」

ここで山本はふと思った。

「あんたも特撮もの出てもいいかもね」

「特撮に？」

「あれはあれで凄い演技の勉強になるのよ」
「ふうん」

「それにダイエットにもなるしね。あんた只でさえ太り易いし」
「まさかヒーロー役!？」

「そればかりじゃないけれど悪役でもよく動くじゃない、あれって」
「派手なコスチュームでよね」

「変身しない主人公のお友達とか妹でも何かと動くでしょ」

「襲われたりするもんね。戦闘員とか怪人に」

「よく知ってるわね、本当に」

「ヒーローでも最近が悪役だし」

「悪役ねえ。ヒーローが」

山本にとっては少しどころではない違和感があった。

「世の中変わったわね、本当に」

「それで私もヒーローになれるの!？」

恵理香の声が弾んでいた。

「だったらポーズとかも練習しないと駄目よね。こうやって」

「こらっ」

目だけを向けて叱る。恵理香は車の中でシリーズの中のヒーローの一人のポーズを شدしたのである。

「そこで電気人間にならないの」

「ちえっ」

「けれどまあ」

叱った後でまた言う。

「悪くないかもね」

「そう思う!？山本ちゃんも」

「グラドルからね。そこから脱皮するのにも」

「悪党をどんどん倒す正義の女ヒーローなんてね」

「いい宣伝にもなるし」

「そうそう」

「けれど演技は真面目にね」

声がキツとなる。

「いい、好きなんだったら余計に」

「わかってるわよ、それは」

「どうだか。あんた気分屋だし」

「大丈夫だって」

「どうかしら」

あまり信頼はしていない声であった。伊達に恵理香を見出して一
緒に住んでいるわけではなかった。

「心配無用よ。ヒーローになれるのよ」

「まあ社長と話してみるわ」

「うんうん」

「それにしろまずはこれからの仕事」

また声を引き締めさせた。

「それはわかっているわね」

「わかってますって」

だがそれに対する恵理香の返答はわかっているのではないのではと思わせ
るものであった。

「バラエティも好きだし」

「あんたって仕事は何でもいいのね」

それは感心するところであった。

「グラビアでもバラエティでも」

「だってそれが仕事なんですよ」

今度の返事はあっけらかんとしたものであった。

「タレントの」

「そうだけれどね。嫌がったりする娘って多いのよ。グラビアにし
るバラエティにしろ」

「ふうん、そうなんだ」

これは恵理香にとっては少し意外なことであった。

「どれも同じ仕事なのよね」

「まあそういう考えっていいと思うわよ」

山本はそんな恵理香の考えを否定しなかった。

「そうして仕事していくのがやつぱりステップアップになるからね」
「山本ちゃんもそう思ってくれるの?」

「だから仕事とってきてるんでしょ。まあ何でもしてくれるから楽
だけれど」

「そうでしょ。けれどヒーローはね」

「ええ」

「ヒーローでいきたいわよね。仮面レイピアとか言ってさ」

「あんたがレイピア?」

西洋の細い剣のことである。刺すことを主としたものでありフェ
シングでもよく使われている。

「そうよ。似合うと思わない?」

「何かレイピアって柄じゃないわね」

「あら、御言葉ね」

その突っ込みにはむっとした顔を見せる。

「けれどいいわ。あのヒーローね」

「そう、あのヒーロー」

「何とかやってみるわ。期待しないで待っていて」

「了解」

「まったく」

嬉しそうにはしゃぐ恵理香を横目で見て困ったような苦笑いを浮かべる。色々と面倒な彼女であるが不思議と嫌いにはなれないのが本音だった。何か妹みたいな感じだった。山本は恵理香を番組に送り出した後で楽屋でノートパソコンを使ってあれこれと調べものをした。それが一段落ついたところで撮影が終わりの時間となったのであった。

第六章

「さてと」

楽屋を出る。そして恵理香を迎えに言った。

すると恵理香はあのヒーローのタレントと楽しそうに話をしていた。色々舞台裏を聞いているようであった。

「へえ、あの時ってそうだったんですか」

「そうだよ、大変だったんだよ」

ヒーローをやっていた役者の方もかなりノリノリで話をしていた。彼は子供の頃熱狂的なヒーローファンでありヒーローをやるとなると狂喜乱舞したという話がある。だから上機嫌になっていたのだ。

恵理香は恵理香ではしゃいでいた。聞いている彼女もかなり乗っていた。

「やっぱりヒーローって危ない撮影多いんですね」

「そうなんだよ」

「そういえばそうだったわね」

それを聞いた山本はそのことに思いを巡らせた。

「ヒーローっていえば確か」

最初のシリーズの話を出した。その俳優は撮影中大事故を起こして半年間も入院していたのだ。これがヒーローにとって大きな転換期ともなったのは事実である。もう一人のヒーローと後のシリーズ化につながったのだから。それを考えると非常に大きい。

しかし。タレントを預かるマネージャーとしてはそんな怪我は負わせられない。ましてや顔に怪我でもされたら。整形があるにしろ絶対に避けなければならぬものであった。

「まずいかも」

ヒーローの主演は生身でもアクションをすることが多い。それはかなり危険なことである。

「爆発起こったじゃない、後ろで」

「はい」

山本のそんな心配をよそに話は続いていた。

「かなり吹き飛んでね。スタントマンなしだったし」

「凄かったですからね、あの場面は」

「うん、本当にね」

彼は言う。

「死ぬかと思っただから」

「死ぬかと」

山本はその言葉に敏感に反応していた。だがそれには誰も気付いてはいない。

「やっぱりヒーローはアクションだからね」

「そうですね。だからいいんですよね」

「うん。ところでさ」

「はい」

恵理香はそれに応えた。

「エリちゃんもヒーロー出してみたらどうかな」

「出たいですよ、やっぱり」

その言葉に本気で応えた。

「こっしてへんしーん、なんてね」

「そうそう。あのポーピングする時が最高なんだよ」

「カードも使って」

「細かいね、本当に」

「何か出たくなっちゃいましたよ」

「そうだね。出られたらこれ程嬉しい役ってないから」

「そうそう」

「一生の記録だよ。後で家族にも自慢できる」

「私もお父さんやお母さんに自慢したい」

「うっん」

山本はそれを聞いてまた考える顔になった。

「やっぱり出たいですよ」

「そうだね。じゃあまたね」
「はい」

こうして恵理香はそのヒーロー俳優と別れた。別れてすぐに山本に気付いた。

「あっ、山本ちゃん」

すぐに彼女に声をかける。

「迎えに来てくれたの？」

「まあね」

山本はそれに応えた。そして言おうとする。

「あのね」

「何!？」

ライダー役は考え直した方がいいのではと言おうと思った。だがここでふと思い直した。

「いえ、何でもないわ」

「そうなの」

「じゃあ帰りましょう」

「今日はこれで終わりだったっけ」

「そうね。夜はフリーよ」

「じゃあこれからカラオケでも」

「お昼にあれだけ歌ったのに？」

「レッスンとカラオケは別喉なのよ」

「そうかしら」

「そうそう。だから行こうよ」

山本の背を押して言う。

「二人でさ。ぱーーーーっと」

「ぱーーーーっとって」

山本はまだヒーローのことで考えているので返事が今一つ歯切れが良くない。

第七章

「またあんた飲むんでしょ」

「まあまあ」

だが恵理香はその声にも平気である。

「ついでに夕食もね」

「そういう問題じゃないでしょ。そもそも」

「細かいことは抜きでさ。久し振りに長い夜なんだし」

「だから遊び過ぎと飲み過ぎは」

「たまには羽目を外すものよ」

「いつもじゃない、それ」

「まあまあ」

怒った顔を見せる山本を宥めにかかる。

「それでさ。考えてくれた？」

そのうえで尋ねる。

「あのヒーローのこと」

「ああ、あれね」

「ここでは自分の考えをまずは隠していた。」

「一応調べたわ」

「うん」

「ちょっとだけど。それでね」

「主役やれそう！？女性ヒーローに」

「待ちなさい」

顔を寄せて問うてくる恵理香をまずは退けた。それからまた答え
た。

「ちょっとだけだけね。わかったことがあるわ」

「何、何」

「一応女性ヒーローなんかも考えてるみたいよ」

「やった、それじゃあ」

「けれど役がもらえるかどうかはまだわからないわよ」
そう釘を刺した。

「それはわかっておいてね」
「うん」

「とりあえずは交渉とかオーディションの話とかも調べておくから」
「主役よ、主役」

「それも調べておくから。とりあえずは大人しくしてて。いいわね」
「うん。山本ちゃんしっかりしてるからやっぱり頼りになるわよ」
「あんたがだらしなないだけよ」

また怒った顔になりそう返した。

「もうちょっと。しっかりしなさい、いいわね」

「はあい」

「返事はしつかりと」

「ちえっ、何かお姉さんみたい」

「ビシビシいくわよ」

それから山本はヒーローに関して調べて交渉をはじめた。何と主役の話まで来たのである。

「奥田恵理香ちゃんだよ」

「はい」

プロデューサーと電話で話をしていた。電話とはいえかなり真剣な話になっていた。

「覚えてるよ。前ゲストで出たの覚えてるかな」

「あれは科学戦隊でしたよね」

「うん。あの時の演技が気に入ってるんだよ。それでね」

「主役に、ですか」

「主役って言ってもあれだよ」

プロデューサーは前もってこう述べた。

「最近ヒーローも同じ番組に何人も出るんだよ。それは知ってるよね」

「ええ、まあ」

もっともこれはこのシリーズの伝統であるが。最初から二人のヒーローがいて活躍していた。止むを得ない事情でそうなったとはいえこれが今に至る伝統となったのである。

「そのうちの一人でどうかな」

「一人に」

「もう一ついいかな、って思う役があるんだけどね」

「もう一つですか」

「うん、こっともレギュラーだけれどヒーローじゃないから出番はぐっと減るんだ」

「どんな役ですか？」

「喫茶店のウェイトレス。主人公の側にいつもいる役だね、恋人じゃないけれど」

「レギュラーなんですね」

念の為それをもう一度確かめた。

「うん、そうだよ。どっちがいいの？」

「それはですね」

二つあるのならば。山本の考えは決まっていた。

彼女は答えた。こうして恵理香は念願のヒーローに出演となったのであった。だが彼女はそれに関してかなり不満であったのだ。

「何よ、それ」

役を聞いて最初に言った言葉はこれであった。

「ヒーローじゃないじゃない」

「それでも番組ではレギュラーよ。出番だって多いし」

「そういう問題じゃないの」

頬を膨らませてそう抗議する。

「あたしはヒーローがやりたいのよ」

「仕方ないでしょ。じゃあ降りるの？」

「いえ、それは嫌よ」

降りるつもりはなかった。折角のレギュラーである。恵理香もそうした分別もあった。

「けれどヒーローじゃないなんて」

「それでもヒーローに出られることは出られるわよ」

「じゃあ出るわ」

結局受けることにした。

「それでいいわよ」

「じゃあそれでね。プロデューサーさんとお話しておくわ」

「ええ。そういえばあのプロデューサーさんと脚本家さんって」

「何!?!」

「相当頑固な人らしいけれど」

「ああ、それは大丈夫よ」

山本はニコリと笑ってそれに返した。

「そちらは私に任せておいて。出番も取って来るから」

「それなら」

かなり不満ではあったがレギュラーに決まった。収録がはじまると恵理香はすぐにさらにさらに忙しくなるのであった。

第八章

「ああ、恵理香ちゃん」

その難しい脚本家が出て来た。彼は料理の達人で何かと問題発言をすることも知られている。アンチ上等というスタンスでも知られている。

「この場面だけれどさ」

「はい」

収録は恵理香がやっているウェイトレスが組織の幹部に襲われる場面であった。

「できるだけね。逃げ回って」

「逃げ回って、ですか」

「そう派手にね。予定じゃ少しだったけれど相当やるから」

「あれっ、殴られて気絶なんじゃなかったんですか？」

「ちよつと変えてみたよ。山本ちゃんの話もあったし」

「山本ちゃんの」

「そうなんだよ。ここはもっと君の出番を増やして欲しいって。俺もそれでいいと思ったし」

「それでいいんですか？」

この脚本家がストリートにそれを通したということがかえって信じられなかったのだ。恵理香は歴代のヒーローを見てきて彼についての話も結構聞いているからだ。

「うん、君の迫真の演技を期待するよ」

「わかりました、じゃあ」

それを受けてあらためて気合を入れる。

「やらせて下さい」

「よし、じゃあやるよ」

「ええ」

こうして収録に入った。恵理香は気合が入っていたこともありそ

の場面は見事に決まった。後でこうした演技が彼女の女優としての評価につながっていくのであった。

「やったわね」

その日に収録された番組がテレビで放送された時に山本が隣で恵理香に囁いてきた。二人は今休日に二人でマンションのテレビを観ていたのである。

恵理香はライトグリーンのショーツに同じ色のタンクトップ、山本は白いカッターといった起きたままの姿であった。山本のスラリとした白い脚の奥にさらに白いものがちらりと見え隠れする。恵理香はその見事な脚を惜しげもなく曝している。ソファーに並んで座ってテレビを観ていた。

「かなりいい演技じゃない」

その場面が終わってからまた言った。

「これ評判になるわよ」

「そうね」

恵理香はコップに注がれた牛乳を飲みながらそれに応えた。山本はその手にイチゴのジャムが塗られた食パンを持っている。食べながらの鑑賞であった。

「何かネットじゃあたしの評判あがってるんだって？」

「そうよ」

山本はその言葉にこくりと頷いて答えた。

「鰻登りよ」

「まあそれが実力よね」

「じら」

その言葉はすぐに嗜めた。

「またそうして調子に乗るんだから」

「御免御免。けれどさ」

ここで山本に顔を向けてきた。

「何？」

「山本ちゃん頑張ってくれたんだね。このシーンで」

「別に頑張ってはいないわよ」
その言葉に静かに返した。

「頑張ったのは貴女じゃない。何言ってるのよ」

「違うわよ。この場面脚本家さんに頼んで入れてもらったんでしょ」
恵理香は言った。

「あたしの為に」

「まあね」

事実だから認めるしかなかった。言葉で応えた。

「有り難うね。あの頑固な脚本家さんにまで頼んでもらって」

「いいのよ、それは」

山本はそれを特に誇示しようとはしなかった。だからこう言ったのだ。

「だってマネージャーなんだし」

「マネージャーだから？」

「タレントが上手くいくようにするのは常識でしょ。気にしないでいいわよ」

「そうなんだ」

「そうよ」

少し恥ずかしそうに述べた。

「だからね。気にしないで」

「有り難うね」

それでも心は伝わった。恵理香はそれを感じてニコリと笑った。

「最初はこの役嫌だったけれど何か好きになっただわ」

「そうなの」

「うん。だからずっと頑張るわよ」

「そう言ってもらえると有り難いわ。けれどね」

「何？」

「あんたが頑張らないといけないのはまだまだあるわよ」

「グラビアとか？」

「それもね。まだまだやるから」

「それと歌も？」

「そうよ。今度ニューシングル出すからね。こっちでも評判いいんだから頑張りなさいよ」

「何か仕事多いなあ」

「仕事が多いのが売れてる証拠」

マネージャーとして当然の言葉であった。

「だからどんどんいくわよ」

「山本ちゃん仕事なら何でも取って来るのね」

「取れる仕事は何でも取らないといけないからね」

「ふうん。けれどさ」

「何？」

「山本ちゃんもテレビに出てみたら？」

「な、何言ってるのよ」

恵理香のその言葉に顔を顰めさせる。

「何で私がテレビに」

「いいと思うけれど。山本ちゃん綺麗だし」

「私はマネージャーよ。マネージャーがどうして」

「そういう企画もあるじゃない。マネージャーさんも一緒に出たりするの」

「あれは反則よ。やっぱりマネージャーは」

「裏方だけれどさ。それでも山本ちゃん評判なんだよ」

「嘘よ、それ」

「嘘じゃないって。本当なんだからさ」

実際に山本の知的で凜とした美しさは業界で評判になっている。

恵理香より彼女の方がずっと綺麗だと言う者までいる程である。当の本人は気付いておらず恵理香も全然気にしていないから表にはなっていないが。

「どう？」

「嫌よ」

山本は即答した。

「あんただけにしなさい」

「ちえっ、つまんないな」

恵理香はそう言われて口を尖らせて述べる。

「折角一緒なのにさ」

「それはそれ、これはこれよ」

山本はそう言い返す。

「タレントとマネージャーの関係よ。よく覚えておきなさい」

「はいはい。面白くないなあ」

「そう思うよりもまず芸を磨くこと」

毅然として述べた。

「いいわね」

「了解。じゃあ今度は本当にヒーローの役頂戴」

「はいはい」

そんな話をしながらオフの朝を過ごしていた。タレントとマネー

ジャーの二人だけのささやかな朝、そんな仲での話であった。

Gカップ グラドル 完

2006・11・1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622b/>

Gカップ グラドル

2008年11月7日08時57分発行